

スベキ者ニコソトテ、彼法ヲ行ケル程ニ、又返シテ案ジケルハ、實ヤ外法成就ノ者ハ、子孫ニ不傳ト云者ヲ、イカバ有ベキト被思ケルガ、ヨシク當時ノゴトク、貧者ニテナガラヘンヨリハ、一時ニ富テ名ヲ揚ニハトテ被行ケレ共、道ガ後イブセク思テ、兼テ清水寺ノ觀音ヲ奉、憑蒙御利生ト千日詣ヲ始タリ、

〔吾妻鏡〕八文治四年九月十四日丁未、長茂本名資茂者鎮守府將軍維茂貞盛朝臣弟也男、出羽城介繁茂七代裔孫也、維茂男敢不耻上古之間、時人感之、將軍宣旨以前、押而稱將軍、而以武威、雖爲大道、每日轉讀法華經八軸、每年一見六十卷玄義文句止觀一部、亦謁惠心僧都、談往生極樂要須、繁茂生則逐電、乍含悲嘆、經四箇年、依夢想告、搜求之處、於狐塚尋得之、持來于家、其狐令變老翁、忽然來授刀并抽櫛等、於嬰兒於翁深窻、令密音云、可爲日本國主、於今者不可至其位云云、嬰兒者則繁茂也、長茂繼遺跡、彼刀令帶之云云、

〔徒然草〕下五條内裏にはばけ物ありけり、藤大納言殿かたられ侍しは、殿上人ども黒戸にて碁をうちけるに、みすをか、げて見る物あり、たそと見向たれば、狐人のやうについゐてさ玄のぞきたるを、あれ狐よとどよまれて、惑ひにげにけり、未練の狐、ばけ損じたるにこそ、

〔駿臺雜話〕妖は人より興る

むかし駿府の御城に、うは狐といひ傳へし狐あり、人は是に手巾をあたふれば、それをかぶりて舞しが、こへのみして形は見へず、たゞ手巾空に翻轉して廻舞のやうを見せし程に、人々興に入り、人手巾をあたふる時は受取る、形は見へねども、もたる手をもの、すりて通るやうに覺へて、其ま、取てゆきける、わかき人々わざと渡さじとあらがふに、なほど堅く持ても、とられぬといふ事なしと語るを、大久保彦左衛門聞て、我はとられじとて、手巾をもちてこれとれといふに、取得ず、さていふは、さて無分別の人よ、あなおそろしとてにげさりぬとぞ、彦左衛門は、手に覺